★ 特集◉図書館員養成100周年 ★

立教大学司書課程の図書館員養成

中村百合子

はじめに

立教大学が司書課程を設置したのは1967（昭和42）年のことである。筆者は2011年の春，東日本大震災の直後に立教大学に着任した。本稿ではそれから今にいたる10年間の本学司書課程の図書館員養成について報告する。

本学は，司書課程の傘のもとに，図書館司書資格を付与する「図書館司書コース」と学校図書館司書教諭資格を付与する「学校図書館司書教諭コース」を置く。池袋・新座の両キャンパスの全学生が登録できるが，池袋のみでの開講である。単位は卒業単位には換算されず，CAP制からも外れている。教員は，正規の専任教員１名（筆者）の他は，有期契約の特任教員１名，週に２日勤務で図書館実習等の教育支援を主担当とする教育研究コーディネーター１名が配置されている。

１．司書課程の登録者と図書館員への就職

１．１　登録者と修了者の数

筆者が着任した年と現在の司書課程の登録者（年度初め時点）と直近２年の修了者（年度末時点）の数を比較すると次の表のようである。全数の後ろに，その内の大学院生数；科目等履修生数を丸括弧に入れて記した。

		2011	2019	2020
図書館司書コース	登録者数	467(10;0)	286(5;2)	246(3;0)
	新規登録者数	119(1;0)	66(0;0)	58(1;0)
	修了者数	71(1;0)	30(0;1)	14(1;0)
	修了せず司書資格取得のみ	不明	35(0;1)	22(0;0)
学校図書館司書教諭コース	登録者数	85(7;0)	53(4;0)	59(2;0)
	新規登録者数	24(1;0)	14(0;0)	19(0;0)
	修了者数	8(2;0)	3(0;0)	4(0;0)

登録者数は2012～2014年度に大きく減らした。これは，新入生向けオリエンテーションで図書館への就職の容易でないことをはっきりと伝えるようになったことが大きいのではないかと考えている。また，本学の場合，学部・研究科の科目との時間割の重複によって在学中の資格取得ができなくなった場合にもクラスの増設といった対応はしないことになっているが（大学執行部の長年の方針である），私の着任直後に保護者との間でこのことが問題化した。これを受け，翌年度からオリエンテーションで時間割重複の可能性について説明することにした。筆者の感触では，これらの対応によって学生たちが登録にあたり熟慮するようになった。

修了生数も，私が着任後，いったん激減したが，現在は戻ってきている。2012年度からは，本学からの修了証は手にしない，「司書資格取得のみ」の者を集計している。本学では「図書館実習」が歴史的に学校・社会教育講座に置かれる他の課程とそろえる形で必修とされてきた。ただし，実習以外の科目をすべて修めれば国家資格を取得できるようにカリキュラムを構成しているので，学生は実習に行って課程を修了するかについて，学修の進行や就職活動等とのかねあいで選択している。

１．２　就職

2011～2020年度末に図書館や関連する業界に正規職の就職をした者で，筆者が把握しているのは次のとおりである。市立図書館６名，県立図書館３名，私立大学図書館１名，国立大学法人等職員（図書）１名，私立学校専任司書教諭１名，公共図書館や大学図書館の指定管理を受託する企業５名，地方公務員９名（うち２名は図書館に配属），書店２名，出版社・編集プロダクション５名，電子書籍の取次会社２名。その他に国家公務員２名，私立

大学職員２名，印刷会社と独立行政法人が各１名。このほか，図書館アルバイト２名，図書館情報学を専攻する大学院への進学４名（うち２名は本学で筆者のもとで研究）。平均して年に２～３名が図書館に直接関係のある進路を選択しているとみている。また，近年はSE職に進む者がちらほらいる。

２．司書課程改革の試み

主として図書館司書コースについて，過去10年の間，少しずつ手を入れてきたので，ここに簡単に述べる。同コースのカリキュラムは，原則として図書館法施行規則の「図書館に関する科目」の定めに従っている。しかし同規則では24単位の修得が求められているのに対して，本学の課程修了には32単位を求めている。これは，「図書館実習」が本学では必修の２単位科目であり，その他に二つの２単位科目を選択して修めること（＋４単位）；「情報サービス演習」は「情報検索演習」と「情報サービス演習」に分かれ（＋２単位）；「情報資源組演習」は「メタデータ演習」と「情報アーキテクチャ演習」に分かれ（＋２単位）ていることがある。また，演習科目は２クラス開講で少人数指導を原則としている。

２．１　図書館実習の制度改革：国際図書館実習の実現

図書館実習は必修の伝統を今のところ維持している旨はすでに述べたが，実習を選択科目とすることも不可能ではない。一方で，実習の意義は，実習に行った学生たちから毎年聞く（本稿に続く政岡和佳さんの論考をご参照ください）。2016年度からは国外での図書館実習を開始した。初年度は香港に３名。2017年度はゼロ，2018年度は香港２名と台湾２名，2019年度はドイツ２名，オーストラリア１名を送り出した。2020年度はゼロだったが，2021年度に向けては今のところ２名が香港に行く予定である。学生たちは条件を満たせば本学の「グローバル奨学金」を受けることができ，実質８～15万円ほどの私費負担で２週間の国外での実習を経験できる（食費は別）。実習先では，国内での実習と同じように，なるべく講義や見学を少なくし，現場経験を積むことができるようお願いしている。

２．２　カリキュラム改革：情報環境の変化をふまえた科目編成と講師委嘱

2019年度から「メタデータ演習」と「情報アーキテクチャ演習」という科目を置いた。この２年ほど前から，図書館の印刷資料を主とする情報資源組織演習のあり方を変えたい気持ちが筆者の中で高まっていた。既存の日本の図書館の資料整理の基礎的な力は今の日本の図書館に勤めるのであれば不可欠だが，図書館の外の情報の整理についての力を養っていかないと，将来的には図書館でも通用しなくなるかもしれないと考えた。英語で諸外国の図書館情報学のカリキュラムを調査し，この二つの科目への再編を関係の兼任講師の先生方に相談して決めた。過去の情報資源組織演習の２科目４単位の内容の大半は「メタデータ演習」で学ぶこととし，「情報アーキテクチャ演習」を英語のInformation Architecture（IA）の基礎理論と演習として新設し，関連著作が多くある，IT企業勤務の方を兼任講師に迎えた。

選択科目のうち「図書館基礎特論」は2019年度からアーカイブズ学の基礎を学ぶものとしていたが，2021年度より科目名を「アーカイブズ概論」とした。今後，この主題に関する知識や基礎的な技能が社会のいろいろな場で重要になってくるだろうと考えたことによる。こちらはデジタルアーカイブズの仕事を実際にしておられる方を兼任講師に迎えた。筆者は大学の外で正規職で働いたことがないから，他の教員には実務経験がありかつ研究業績のある方を得たいと考えている。

２．３　コンピテンシーに基づく教育へのシフト

これは昨年度，調査に着手したところである。国内でもすでにこのアプローチで司書課程の教育をとらえなおしている大学の話は聞くから，本学は後発の自覚があり，述べられることはない。恥ずかしながら今のところは，本学の司書課程はHPで，「“情報”スペシャリストの育成」と「“世界の”情報環境の理解」の二つを目標として掲げ，これを兼任講師を含む課程の全教員で共有しているという程度にとどまっている。

おわりに

筆者は，本学の前に６年半の間，勤めた大学では，教育学の学科の一教員としてゼミをもつなどしながら司書課程の業務を担当していた。本学では学校・社会教育講座司書課程が私の主たる所属

となり，文学研究科の教育学専攻で院生を教えている。司書課程は学部から完全に独立していて，筆者は司書課程に専心できている。しかし，学部という大きな塊の中にいないがゆえに，司書課程とその教員の存在意義は学内でも自ら説得的に語らなければならず，これはけっこう大変な責務である。司書課程は図書館員養成課程であるが，図書館への就職を選択する（できる）者は極めて限られている状況があり，そのことは大学関係者にはすでにだいぶ知られている。また，無駄を嫌う若者はたぶん増えていて，司書課程の登録学生たちに，就職に直接はつながりそうもない資格の取得に対して４年間，意味を感じ続けてもらうというのは，容易なことではない。それもあってカリキュラム改革を続けている。

ただ，この３，４年くらいだろうか，学生たちとの関係においては，当方の課程運営の意図（目標など）に対する理解を得られているという手応えを感じるようになった。2012年度以降，毎年年度末に卒業・大学院修了をする学生たちに依頼している無記名のウェブ調査で，司書課程の教育への意見を自由に書いてもらっている。今年，受け取った調査結果の中に次のようなものがあった。「図書館以外の領域で活躍される講師の授業を多く受け，司書として就職することが厳しい現在，図書館にまつわる知識や運営のノウハウなどを私生活や他の仕事においてどのように生かせるか学べたことはとても貴重なものでした。」「受講時は，非常に魅力的で個性的な講義が多く，講義が毎回楽しみであった。」これらは実習に行かず図書館以外に就職をした学生たちのもので，課程での学習そのものに一定程度満足してくれたように読める。

図書館に勤務する卒業生の存在には，これからどんな図書館を見せてくれるのだろうとわくわくする。いつまでも，彼・彼女らの応援団でいたい。しかし，図書館に就職する選択をしない学生にも，人生において，情報のスペシャリストとしてのプリンシプルから考え行動したと思う瞬間があるのなら，それもまた司書課程の教師冥利に尽きる。

（なかむら　ゆりこ：立教大学）

［NDC 10：010.7　BSH：1. 図書館情報学　2. 図書館員］